出演者プロフィール

【いとう柚子(いとう ゆうこ) 氏】

新庄市出身・山形市在住

日本現代詩人会会員／山形県詩人会会員／山形市芸術文化協会会員

３０代半頃詩作をはじめる。同人誌「阿吽」「ささら」「E詩」を経て現在所属なし。

万里小路譲主宰一枚誌「表象」、コールサック社文芸誌「コールサック」に作品を発表。

詩篇『春の鳥かご』が第１５回日本詩歌句協会賞の詩部門優秀賞受賞。

詩集『まよなかの笛』、『樹の声』、『月のじかん』、『冬青草をふんで』

【高　啓（こう ひらく）氏】

秋田県湯沢市生まれ。山形市在住。山形大学人文学部卒業。 詩集『母のない子は日に一度死ぬ』で第一回山形県詩人会賞受賞。詩集『母を消す日』でH氏賞次点。詩集『二十歳できみと出会ったら』で山形市芸術文化協会賞受賞。近著・職業的自分史『非出世系県庁マンのブルース』（高安書房） 山形県詩人会事務局長・日本現代詩人会会員

【万里小路譲（まりこうじじょう）氏】

『万里小路譲詩集』、『孤闘の詩人・石垣りんへの旅』、『吉野弘その転回視座の詩学』、『いまここにある永遠――エミリー・ディキンソンと E.E.カミングズ』、『学校化社会の迷走』、『フェルメール幻想ほか』、『楽音の彼方へ』など二十二冊刊行。鶴岡市在住。山形県詩人会副会長。「おんがくハウス」サクソフォン講師。

【新作合唱曲】

女声合唱とピアノのための

《さくら ―ひるの―》

詩 いとう柚子　作曲 名倉明子

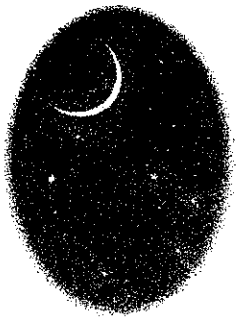
猫

庭に一本の大きな木がある
どこかよそから来て
木に居ついてしまった年老いた猫
うたたねし
ゴロゴロのどをならし
生きるちえをめぐらし
もの思いにふけり
家主が窓からよんでも
目があうとしらんぷり
ときどきふらりとどこかに出かけても
その木にかえってくる
ひとり住まいの家主が
せつない思いをしているときだけ
ちいさく鳴いて
ちいさくしっぽをふって
いつも
じぶんの領域で
猫の生活をしている
猫

詩集『月のじかん』より

からすうりの花

あれほどくっきり
「わたしは　ここ」といっていたのに
あけがた　もうどこにもいない
月の仮のすがただった？
そういえば
ゆうべの月
あんなにもたくさん欠けていた



詩集『月のじかん』より

さくら ―ひるの―

やわらかな気流のなかを
はなびらがふりそそいでいる
円陣をくんだ少女たちに
だれかのひとことが輪をめぐり
輪のなかではじける
無数の屈託のない鈴の音になって
舞いおちながら　はなびらが
ひとりひとりの背につけていった
みえないしるしに
胸の奥深いところに灯していった
うすくれないの焔に
少女たちはだれひとり気づかない
母たちの　祖母たちの
もっと遠い日のたくさんの女たちの
時間の上にふりつもった
うすい　ちいさな
ひとひらひとひらの光と陰
さよならをいい交わして散っていった
少女たちの円陣のあとに
はなびらは
果てもなくふりつづける

詩集『まよなかの笛』より

二十歳できみと出会ったら

高　啓

手をつないで公園を歩いているのだが
むこうに池が見えてくると手を放して駆けていく
そのうつくしい曲線をかつてどこかで視たような気がする
ほんとうは日々をただそのために生きてきたくせに

きみと六つで出会ったら
きみはきっとぼくの傍らに椅子を寄せてきて
ほかの子と話しているぼくの手を机の上で握るだろう
園服姿のきみが五つの指で髪を掻き分けるのをちらり視しても
ぼくはゲラゲラ笑ってまだ向かいの女の子と話しているだろう

きみと十で出会ったら
学校からの帰り道、深い雪に相手を押し倒して
互いの顔に雪を浴びせてじゃれ合うだろう
そうして思わず度合いが過ぎるときみは顔を紅らげ
涙目でぼくに雪玉を投げつけるだろう

女は池の鯉にパンを千切って放る
ちいさなパンくずに初めは子鯉が寄ってくるが
やがて大きなやつらが集まってきてそれを奪う
すると女は小さきものらに届けようと
こっちだよこっちだよ　と
可憐な声をあげて左に投げる

十五できみに出会ったら
きみが編んだ長い長いマフラーでふたりの首をつなぎ
電柱の下が照らされた雪の道を歩いて帰るだろう
セーラー服の胸のふくらみに落ち着かなくなったぼくは
物陰で急にきみを抱きしめてくちびるを重ねようとして
きみにいとしいビンタをくらうだろう

十八できみに出会ったら
図書館の書棚の間でそっと手紙を渡し
きみを夕焼けの坂道に誘い出すだろう
これからどんな人生がはじまるというの？
そう言って物憂げに夕陽を視るきみの大人びた横顔を

ぼくはこの世でいちばんふかい未知と思い込むだろう

その女は遠い昔のぼくみたいにゲラゲラと笑い
芝居じみたはしゃぎ声とこれ見よがしの嘆きとをふりまく
きっと男たちはそれにやられるね
無意識のうちに男を惹きつけておいて
でも　ふいっと袖にする
奔放ゆえに罪つくりなおまえが目にみえる

二十歳できみと出会ったら
きみへの関心をおくびにも出さないで
世界のあり方について話すだろう
そんなぼくに魅かれるのを根気よく待って海の見える丘に
誘い
夕焼けにまぎれてきみの唇を奪ってしまう
けれどそこできみがぼくの差し入れる舌に応えたりしたら
ぼくは慌ててきみの一生を受け止めようと決意するだろう

二十七できみと出会ったら
きっと場末の酒場にきみを誘い出し
少し酔いがまわったところで求めるだろう

二度目からはきみの部屋に入り浸って
ピンクの箱が空になるまでやりまくり
その身体の稜線こそが世界の輪郭なのだと看做して
きみに何度も愉悦の声をあげさせることに淫するだろう

池から離れて歩きはじめると
女は憂いを含んだ瞳で振り返る
けれどおまえが求めるひとはいまここにはいない
わかっているよ
おまえにとっておれは序列四番目の相手
それでもおれの目はおまえに注がれて離れることをしらない

三十五できみと出会ったら
ぼくはきみを女としてみないふりをするだろう
女としてではなく一人の人間としてみるからと
いまならセクハラかパワハラみたいな言葉で
女を武器にするな
なんて　きみの脇の甘さを指摘するだろう

四十二できみと出会ったら
それでいてすぐさま恋に落ちるだろう

きみの身体はこの世界でもっともうつくしく
きみの心は世界でもっとも価値あるものにちがいない
けれど　ぼくはきみを妊娠させないために
せせこましい工作をしてきみをうんざりさせるだろう

ほんとうは女に告白したことなんかなくて
いつも好意を寄せられるのを待っている
するとおまえはぼくにしな垂れかかり
この胸で眠りについたりもする

五十五できみと出会ったら
またよこしまな欲望できみをホテルに誘うだろう
けれどきみの片方の乳房は失われていて
ぼくはそれを直視できるかどうか
その胸の大きな傷を視ても
（というより乳首の無い胸を視ても）
勃起できるかどうかばかりが気にかかり
上服を脱がないまま性交しようとするだろう

六十一できみと出会ったら
ひたすら荒廃していくこの世界のなかに
まだかろうじて残る意味を探そうとして
ぼくは何度も何度もきみを愛撫するだろう
そして何度目かにきみが
我慢していたの　と痛みを口にすると
ぼくははじめてじぶんの愚かさを悟り
きみのなかに神々しい性をみるだろう

風呂上りに女は素っ裸で寝そべって
大股開きで四番目の世話人に身体をゆだねる
少し紅味がかった股間には丁寧に
けれど全身には手早くローションを塗り
昼間の疲れで眠りこけそうなところを
いそいでパジャマに着替えさせる
おまえはおれより五十七年も遅れてこの世に生まれた
それに少しだけおれに似てる
おまえと恋をすることはない
だから
おれはもう誰とも恋することなく死んでいくだろう
そう戯れに口ずさんでみる

夢のかけら　（抄）

万里小路譲

早春に見つめあうこと恋と知る
（春の陽浴びて見つめ合う
だれ　と　だれ？
二匹のアマガエルさ
うつろな目で向き合って
無言で通じているのか
それとも交わしている蛙語は
好きよ　とか　抱いて
とか　かな？）
　a long gaze
　in early spring
　turns out to be love

愛を傷と言い直す春霞
（見つめ合ってなど
いないのさ
いまここにあるのは
瞳の奥へと吸い込まれ
見つめ合うまぼろしの瞬間が
霞へと消えて
思い煩っていた
かつての少年の幻――）
　in the spring haze
　love is rephrased
　as pain

春霞遠く去りゆく人ひとり
（去っていくのは
心の内に棲んでいるあの
夢追い人か？　いや
春の霞へと立ち去るのは
二匹のアマガエル
ほら
見つめ合っていたのに
どこへ行ったのやら）